

文科系学部留学生の日本語能力に関するニーズアナリシス

——九州産業大学国際文化学部留学生への質問紙調査報告——

久保田 優 子

(1995年1月20日受理)

〈目 次〉

はじめに

I. 調査対象者の概要

II. 日本語使用の実態

III. 全般的な日本語能力

IV. 大学の授業での日本語能力

V. 日本語授業への要望

おわりに

注

主要参考文献

はじめに

現在、日本が重要施策として推進している留学生10万人増計画の進展により、日本への留学生数は年々増加している。その一方で、留学費用とともに日本語能力の不足が留学生にとって大きな問題となっている⁽¹⁾。日本語能力の向上には適切な日本語教材が不可欠である。現在、大学入学前の準備教育のための基礎的能力養成用の日本語教材は数多く開発されているが、大学学部レベルの授業で使用するための教材の開発はまだ遅れている。そのうえ最近留学生は多様化しており、個々の大学により留学生の状況はさまざまであるため各大学の状況に適ったテキストの開発が緊要である。

そこで、本研究は文科系学部留学生のための日本語教材開発を最終目標に置き、その前段階としてコースデザインの基礎資料とするために国際文化専攻の留学生を例に日本語能力についてニーズ分析を行なうことを目的としている。

言語教育のコースデザインは①ニーズ分析②目標言語調査③レディネス分析④シラバスデザイン⑤カリキュラムデザイン⑥評価⑦コンサルティングから成っており、日本語能力のニーズ分析はコースデザインを行うための出発点である。外国人留学生の日本語能力のニーズ分析に関する先行研究としては、仁科喜久子によるものなどがある⁽²⁾。これらの研究成果はいずれも有益なものであり参考となる点が多々ある。しかし、同じ外国人留学生でも日本語能力のニーズは在学段階（大学院レベル・学部レベル）および専攻分野により異なるため、個々のコースごとにニーズ分析を行なう必要がある。そこで、本研究では九州産業大学で国際文化を専攻している学部留学生について日本語能力のニーズ分析を行

う。国際文化学部は平成6年4月に開設されたばかりであるが、学生の国際的視野を広げ海外との交流促進のために1学年60人(定員の3割)の留学生を受け入れている。1学部でこのように多数の受け入れを行なっている例は全国的にみても少なく、本研究は文科系学部のための日本語教材開発に寄与できる点で有意義である。

まず、国際文化学部において必要とされる日本語はどのようなものであろうか。「国際文化」はきわめて最近、大学の学部名として冠され始め呼称されだしたものであり、まだ専門分野として確立されているとは言いがたい。学部の目的「日本文化とアジア・ヨーロッパ文化への理解をもち、高度の国際感覚と豊かな知識、グローバルなビジョンを身につけた人材の養成」とカリキュラム「日本・アジア・ヨーロッパ文化理解に関連した100余の開講科目と現地実習」及び先行研究を参考にして判断すると、①基礎日本語②文化理解に関する専門用語③日本社会・文化の三要素及び「この分野に特徴的な構文に対する知識」が必要であろうと推測される⁽³⁾。②の文化とは、学生が自分の選択した特定地域や文化圏の文化ということになる。国際文化学部において必要とされる日本語の特定のためには、授業担当の教官側にニーズ分析を行なわなければならない。また大学の授業の教授用語は日本語であり、留学生は日本人学生とまったく同等に扱われるため、かなり高度の日本語能力が求められており、入試に日本語能力試験が課されている。

次に日本語授業は、1・2年次に週あたり2科目(1コマ90分:通年)が開講されている。日本語は必修ではないが外国語の単位として認められており、大部分の留学生が1ないし2科目履修している。日本語授業の目的には2つの側面がある。一つは、専門科目履修のための日本語能力養成の補習的側面(手段)であり、もう一つは日本留学の目的としての日本語の習得(目的)である。後者では日本語そのものの専門性を高める必要がある。これら二つの目的を考慮しつつ、大学学部段階では講義のノートをとることやレポート作成が必須であり、専門書も読まねばならないことを考えて、筆者が担当する日本語の授業では1科目は作文力養成を中心に、他の1科目は読解力習得を教育目標において授業を行った。使用した教科書は、前者では『実践にはんごの作文』凡人社、後者では『コンテンポラリー日本語中級』桜風社である。

本研究は、以下の4項目について知るために学習者自身による日本語能力の自己評価を質問紙調査により把握し分析を行った。留学生がどのような日本語を必要としているのか。実際の能力はどのくらいか。必要とされる能力とのギャップをうめるためにどうやって解決しているのか。どのような問題点を抱えているのか。

調査時期は、入学後約9か月経過した後期授業終了月(平成6年12月12日・14日)である。留学生は1年次の授業が終了する頃になれば大学の授業にはどのような日本語が必要であり、自分の日本語能力はどのような点が不十分であるか判断できると考えたからである。また、筆者自身の授業の内容や方法に関する改善の基礎的資料にする意味もある。

調査票の作成にあたっては、仁科論文(注2参照)を参考にした。しかし、理工系大学院レベルを対象とした仁科の調査項目では調査対象が文科系の学部レベルの留学生には不適切なものもあり、それらを適宜除外し適切なものを付加した。その過程では質問項目の適切性・妥当性を高めるために、同じ文科系の本学経済学部留学生(2年生)3人に対して予備調査を行い質問項目の修正を行った。なお、文中に挿入の表中の数字は人数(単位:人)を示し、()内の数字は%(小数点以下を四捨五入)を示している。

また、調査結果の分析の際には日本語授業中の日本語能力や定期試験の結果とつきあわせて考察した。

I. 調査対象者の概要

調査対象者は国際文化学部留学生1年生（開設初年度であるため1年生のみ在籍）のうち日本語授業の選択者で、調査日の欠席者を除く43人である。出身国は、中国38人（88%）・台湾2人・韓国2人・マレーシア1人（中国系）と中国からが大部分を占めている。年齢構成は、最低21歳から最高36歳で平均25.3歳。性別は、男27人・女16人。留学費用の区分では全員が私費であり、大部分が留学費用を得るためにアルバイトをしている。留学目的は、「帰国後、日本と関係のある貿易や観光業あるいは日系企業に就職するため」が大部分を占める。

表1 滞日期間

0～1 年未満	1～2 年未満	2～3 年未満	3～4 年未満	4年 以上	不明
0(0)	5(12)	36(84)	1(2)	0(0)	1(2)

滞日期間は表1より2年以上3年未満のものがもっとも多く36人（84%）を占める。日本語を学習した機関は、表2より来日前に自国の学校で日本語を学習したものがのべ9人いるものの、日本の日本語専門学校（いわゆる日本語学校）が41人ともっとも多く全体の95%を占める。即ち大部分が本学入学直前は約1～2年の日本語学校在学すなわち就学生であった。さらに、ほとんどが地元福岡市内にある日本語学校の出身である。

表2 日本語を学習した場所（複数選択）

自国の学習機関（高校など）	5
自国の日本語専門学校	4
自国で独学	4
日本の学習機関（高校、専門学校など）	2
日本の日本語専門学校	41(95)
本学（九州産業大学）	43
その他	0

表3は日本語学習歴を示している。今回が2度目以上の来日になる場合はそれぞれの学習期間を合計したものであり、本学に入学してからの日本語学習期間（約9か月）も含まれている。日本語を学習した期間は2年以上3年未満のものがもっとも多く31人（72%）、次いで1年以上2年未満と、3年以上4年未満がそれぞれ5人（12%）、4年以上が2人いる。

表3 日本語学習歴

0～1 年未満	1～2 年未満	2～3 年未満	3～4 年未満	4年 以上
0(0)	5(12)	31(72)	5(12)	2(5)

II. 日本語使用の実態

表4より講義やゼミの時には、「いつも日本語」「重要な内容の時日本語」を合計すると、35人(81%)と大部分が日本語で話しており、「重要な内容の時自国語」「いつも自国語」は3人(7%)しかいない。これは、大学での教授用語が日本語であるためであろう。ところが、講義・ゼミのみでなく休憩時間や授業以外の時間も含めた大学での日本語使用については、表5

より「日本語を多く話す」は5人(12%)と少なくなり、「ほとんど日本語」はひとりもない。「日本語と自国語と半々」が21人(49%)ともっとも多いものの、「自国語を多く話す」「一日中ほとんど自国語を話す」合計は17人(40%)と、講義やゼミ以外は自国語の使用が多いことがわかる。大学で授業以外は日本人より同国出身者と多く話している実態が示されている。さらに、表6は、大学、アルバイト先、自宅を含めて一日中の言語生活を示している。日本語使用が多いもの(「一日中ほとんど日本語」「日本語を多く」の合計)16人(37%), 自国語使用が多いもの(「自国語を多く」「ほとんど自国語」の合計)14人(33%)⁽⁴⁾, 「日本語と自国語半々」が13人(30%)と、ほぼ3つの形態に分かれている。大学においてよりも日常生活において日本語使用が多いのはアルバイト先で日本語を使用する機会が多いからであろう。

表4 講義やゼミの時、何語で話すか

いつも日本語で話す	28 (65)
重要な内容の時、日本語で話す	7 (16)
重要な内容の時、自国語で話す	2 (5)
いつも自国語で話す	1 (2)
その他	4 (9)
不明	1 (2)

表5 大学では、日本語と自国語とどちらを多く話すか

一日中ほとんど日本語を話す	0 (0)
日本語を多く話す	5 (12)
日本語と自国語はほぼ半々	21 (49)
自国語を多く話す	14 (33)
一日中ほとんど自国語を話す	3 (7)

表6 一日のうちで日本語と自国語とどちらを多く話すか

一日中ほとんど日本語を話す	4 (9)
日本語を多く話す	12 (28)
日本語と自国語はほぼ半々	13 (30)
自国語を多く話す	13 (30)
一日中ほとんど自国語を話す	1 (2)

III. 全般的な日本語能力

表7-1は日本語の全般的な能力についての自己評価をまとめたものである。まず、聴解力について、「テレビドラマ」「電話」「日常会話」が7割以上(約70%と約90%の合計。以下同様)わかると評価するものはそれぞれ全体の70%・84%・84%おり、25%以下(約25%と0%の合計。以下同様)であるとするものはそれぞれ全体の7%・2%・2%と日常生活面での聴解力を高く評価している。これに対して、授業時間を中心とした「抽象的な議論」「専門分野の議論」についての聴解力が7割以上あるとするものはそれぞれ23%・32%しかおらず、これらの聴解力は25%以下とするものがそれぞれ39%・35%もおり低く評価している。会話力では、「電話」と「日常会話」についてはそれぞれ全体の76%・77%が7割以上できると評価している。これは、表6でみたように言語生活において約7割が一日の半分

表 7-1 日本語能力について（自己評価）

技能	能力 項目	約90%	約70%	約50%	約25%	0%
		聴 解 力	0 (0)	10 (23)	16 (37)	16 (37)
会 話 力	抽象的な議論	1 (2)	13 (30)	14 (33)	14 (33)	1 (2)
	専門分野の議論	8 (19)	22 (51)	10 (23)	3 (7)	0 (0)
	テレビドラマ	15 (35)	21 (49)	6 (14)	1 (2)	0 (0)
	電話	19 (44)	17 (40)	6 (14)	1 (2)	0 (0)
	日常会話	1 (2)	5 (12)	18 (42)	16 (37)	2 (5)
読 解 力	抽象的な議論*	1 (2)	6 (14)	20 (47)	15 (35)	1 (2)
	専門分野の議論	10 (23)	23 (53)	9 (21)	1 (2)	0 (0)
	電話	14 (33)	19 (44)	9 (21)	1 (2)	0 (0)
	日常会話	3 (7)	12 (28)	19 (44)	9 (21)	0 (0)
筆 記 力	専門分野の読み物	7 (16)	18 (42)	14 (33)	4 (9)	0 (0)
	新聞・雑誌	17 (40)	16 (37)	8 (19)	2 (5)	0 (0)
	平易な文章	3 (7)	12 (28)	19 (44)	8 (19)	1 (2)
筆 記 力	ゼミのレポート	6 (14)	12 (28)	21 (49)	4 (9)	0 (0)
	講義ノート	6 (14)	9 (21)	19 (44)	9 (21)	0 (0)
	事務的書類	9 (21)	14 (33)	14 (33)	6 (14)	0 (0)
	手紙					

*抽象的な議論には不明1人があるが表からは除外した。

ないしそれ以上日本語を使用しているからであろう。しかし、「抽象的な議論」と「専門分野の議論」が7割以上できると評価しているものはそれぞれ14%・16%しかいない。次に読解力についても、「新聞・雑誌」「平易な文章」が7割以上理解できると評価しているのはそれぞれ58%・77%であるのに対して、「専門分野の読み物」については35%しかいない。筆記力については7割以上できると答えたのは、「ゼミのレポート」35%、「講義ノート」42%、「事務的書類」35%、「手紙」54%であり、他の聴解・会話・読解の3技能に比べ書く能力を低く評価している。

以上から、抽象性、専門性の高いレベルの議論については聴解力、会話力とも不十分であり、専門書を読む力も不足しており、書く能力については全般的に劣っていると感じていることがわかる。

次に、これら日本語能力と滞日期間との相関をみてみた。その結果が表7-2である。表7-2中の日本語能力平均値は表7-1における日本語の4技能を各項目ごとに能力約90%を1、70%を2、50%・25%・0%をそれぞれ3・4・5と置き換え学生ごとに平均値を算出したものである。平均値が1に近いほど日本語能力の自己評価は高いわけである。この日本語能力の平均値は、滞日期間が1年以上2年未満で2.6、2年以上3年未満で2.4、3年以上4年未満で2.9となっており、必ずしも滞日期間が長ければ能力が高いとは評価していない。また、日本語学習期間との相関をみても同じような結果であった。つまり、滞日期間や学習期間が長ければ日本語能力が高くなるわけではない。これは、一度身につけてしまった日本語の誤用がなかなかとれなかったり、初・中級段階が終わっ

表 7-2 滞日期間と日本語能力

滞日期間	日本語能力平均値
0~1年未満	—
1~2	2.6
2~3	2.4
3~4	2.9
4~	—

*滞日期間が不明のもの1人を除外した。

て自分で学習する段階になったときに適切な学習方法がわからないといった原因が考えられる。

専門的、抽象的な議論の聴解や、その議論への参加および筆記全般においては漢字の知識が欠かせないため漢字能力についてきいてみた。(表8) 漢字の読み方・書き方・意味もわかるのが1000字未満とするものが半数強を占めている。あく

表8 漢字能力(自己評価)

250字未満	1 (2)
500字未満	4 (9)
1000字未満	19 (44)
2000字未満	7 (16)
2000字以上	12 (28)

まで学生の自己評価であるため厳密性は欠くが、日本人のこどもが小学校6年間で学習するのが約1000字であることと比べてみると、この漢字力では専門的、抽象的な議論の聴解や会話、筆記は無理である。日本語能力試験1級では、大学で学ぶのに必要な漢字能力として2000字を設定しているが、本調査で2000字以上と評価したものは28%しかない。また、250字未満と評価した1人は韓国出身者、500字未満と評価した4人の内訳はマレーシアの1人、中国が3人である。

漢字能力を低く自己評価している原因として考えられるのは、母語の影響である。漢字の読み方は日本語は音・訓の二通りが普通であるが、中国・台湾・韓国では一通りだけしかない。表記の方法も、中国では簡体字、台湾・韓国では旧字体であり、現在の日本語の新字体と異なっている。また、意味も日本語と中国語とでは異なる場合がかなりある。したがって、漢字学習がもっとも有利であるといわれる中国出身者においてさえ、3人が500字未満と自己評価している。

さらに、留学生の出身国における漢字学習環境も漢字能力習得に大きな影響を及ぼしていると考えられる。韓国では漢字は日常生活ではほとんど使用されず、学校教育においても漢文の読解が主であって漢字教育はあまり重視されていない。また、マレーシアの学校教育ではマレー語・英語が重視されているため漢字学習の時間が多いわけではない。

漢字能力が不十分であるとする自己評価の結果は、今後効果的な漢字学習の方法を指導する必要性を示唆するものである。しかし、漢字学習方法については、個々の指導例の報告やシラバス案・漢字力評価の試案はあるもののまだ体系的な研究はなされていないのが実情である⁽⁵⁾。

IV. 大学の授業での日本語能力

前にみた日本語の能力不足が大学の講義・ゼミにどのように影響しているのかきいてみた。表9より、全体の約7割が講義・ゼミは「よくできる」「一応できる」と答えている反面、「あまりできない」「全くできない」と答えたものが約3割にのぼる。さらに「発表」と

表9 講義・ゼミでは日本語はどのくらいできるか

項目	程 度	よく	一応	あまりで	全くでき	不明
		できる	できる	きない	ない	
発表		2 (5)	28 (65)	10 (23)	3 (7)	0 (0)
聞き取り		5 (12)	28 (65)	10 (23)	0 (0)	0 (0)
書き取り		5 (12)	23 (53)	14 (33)	0 (0)	1 (2)
論文(レポート)を読む		5 (12)	27 (63)	10 (23)	0 (0)	1 (2)
論文(レポート)を書く		3 (7)	23 (53)	15 (35)	1 (2)	1 (2)

「論文（レポート）を書く」ことが「まったくできない」と答えたものがそれぞれ3人・1人いる。各項目の「よくできる」「一応できる」の合計を詳細にみると、「聞き取り」と「論文（レポート）を読む」がそれぞれ77%・75%に対して、「発表」「書き取り」「論文（レポート）を書く」はそれぞれ70%・65%・60%と若干低く評価している。

この点を授業や定期試験の結果と照合すると、発表においては漢字の読みまちがいが多い。また、文末の発音が不明瞭な場合が多いため文の意味が不確実になる。レポートにおいては、促音・拗音・長母音の書き間違いが多くみられる。さらに読みと発話において、読みとぼしや話とぼしが多くみられる。他方、用法や構文上の誤りは比較的少ない。これらの誤りはいずれも日本語の表音部分（ひらがな・カタカナ）即ち、日本語の音に弱いことを示している。それは中国語など表意文字を母語とする学習者の場合、視覚認知により言語を理解習得する傾向が強く、その反面聴覚認知力が弱い特徴があるためである。したがって、視覚認知で得た言語情報を聴解力・発話力へと結びつける練習がさらに必要である。

次に、授業の理解度についてきいてみたのが表10である。「だいたいわかる」と答えたものが84%おり、大部分が授業を理解している。これは、授業の理解に必要なとされる聴解力および板書やテキストなどを読み取る能力を習得していると自己評価しているためであろう。しかし、「よくわかる」のは9%しかいない。表10で、授業が「あまりわからない」と答えた3人に理由を聞いたのが表11である。自己の「日本語以外の基礎的学力の不足」1人、「授業内容に問題がある」1人、「その他」（教官が話すのが早すぎる）1人であった。このことは、教官側にも授業の方法や内容において留学生に対するさらなる配慮を求めるものである。

また、授業が理解できないとき、どのようにして補習しているのか、複数選択できいた結果が表12である。「本や辞書で調べる」即ち自学自習で解決できるものが27人（63%）いる。その反面、「同じ出身国の友達に聞く」「日本人の友達に聞く」「後で先生に聞く」がそれぞれ26人・24人・10人おり、自分で解決できないため他に助けてもらう場合もかなりある。もっとも問題なのは「そのままにしておく」場合も7人いることである。

講義やゼミで質問するかどうかきいたのが表13である。「よく」「ときどき」「たまに」質問すると答えたのは36人（84%）にのぼるが、「あまり」「ぜんぜん」しないものが6人いる。その理由は、表14で、「意見はあるが日本語で表現できないから」と答えたものが2人いる。これは、表7-1で抽象的専門的な議論についての会話力の自己評価が低かったことで説明される。

次に、表7-1で「専門分野の読み物」の読解力を低く評価していたことについて授業との関連できい

表10 授業はどのくらいわかるか

よくわかる	4 (9)
だいたいわかる	36 (84)
あまりわからない	3 (7)
わからない	0 (0)

表11 授業がわからない理由

日本語の能力不足	0
日本語以外の基礎的学力の不足	1
授業内容に問題がある	1
授業の方法に問題がある	0
授業内容の水準が高い	0
その他	1

表12 授業が理解できない時の補習方法
(複数選択)

本や辞書で調べる	27 (63)
同じ出身国の友達に聞く	26 (60)
日本人の友達に聞く	24 (56)
後で先生に聞く	10 (23)
そのままにしておく	7 (16)

表13 講義やゼミで質問するか

よくする	4 (9)
ときどきする	12 (28)
たまにする	20 (47)
あまりしない	5 (12)
全然しない	1 (2)
不明	1 (2)

表14 講義やゼミで質問しない理由

話の内容が理解できないから	0
意見はあるが日本語で表現できないから	2
質問も意見もないから	3
その他	1

表15 専門書は何語で読むか

日本語のみ	27 (63)
日本語と自国語	13 (30)
自国語のみ	0 (0)
その他	1 (2)
不明	2 (5)

表16 日本語の専門書の理解度

よくわかる	4 (9)
大体わかる	31 (72)
少しわかる	8 (19)
あまりわからない	0 (0)
全然わからない	0 (0)

表17 日本語でレポートやゼミのレジュメを書くことができるか

自分ひとりでできる	22 (51)
自分ひとりでできないので 先生や日本人の友達に手伝ってもらおう	17 (40)
できない	0 (0)
その他	1 (2)
不明	3 (7)

てみた。(表15) 専門書(ここでは教科書や参考書)は「日本語のみ」で読むものが63%、「日本語と自国語」で読むものが30%いる。それは、日本語だけでは理解が不十分なときに自国語のものを参考にするからであろう。表16より日本語の専門書が「大体わかる」と答えたものが約7割いるが、「よくわかる」のは9%しかおらず、専門書の読解力不足に困っていることがわかる。その原因として専門用語および書き言葉についての知識不足が考えられる。

日本語能力の4技能のうちでもっとも低く評価していた筆記力についてきいたのが表17である。日本語でレポートやレジュメを書くことが「自分ひとりでできる」のは約半数であり、「自分ひとりでできないので先生や日本人の友達に手伝ってもらおう」ものが4割いる。留学生は大学の授業においても書く能力不足を問題として抱えている。この問題解決のためには、専門用語の導入、レジュメに特徴的な形式およびレポート作成上の構成の方法などの指導が必要である。

V. 日本語授業への要望

次に日本語の授業でとくに習いたいことを3つ選択させた。(表18) 表17でみたように書く能力が不足しているとの自己評価を反映して、「論文・レポートの書き方」が21人ともっとも多い。次いで、「口頭発表の仕方」が19人となっている。これも、表7-1・表14でみたよ

うに抽象的専門的な議論についての会話力の不足の反映であり、専門用語の学習および発表の時に適切な文章表現の学習を求めている。これらの要望は、すでに考察した国際文化学部において必要とされる日本語能力に対して、留学生が自己の日本語能力を不十分であると認識していることを示している。さらに、「日常会話」14人とつづいている。これは、日常会話のレベルにおいても適切な表現がわからずに困っている状況を示すものである。

最後の質問として、日本語授業に対する要望を自由に書いてもらった。(表19) 意見は多様であるが大別すると(1)授業内容(2)授業方法(3)カリキュラムに分類される。そのうち授業内容に関する要望がもっとも多く、なかでも「レポートの読み方、書き方を習いたい」は再度繰り返して要望している。また、教材面では「新聞・雑誌・物語・映画」、語彙の面では「専門用語・流行語・外来語・方言・アクセント・俗語・諺」を習いたいと要望している。「文法」も習いたいと要望している。さらに、「語彙を豊かにしたい」「作文をたくさんしてほしい」「ヒヤリングの練習をしてほしい」「日常会話を勉強したい」「長文読解」「表現方法を教えてほしい」「基礎的な練習をしてほしい」「日本語をもっと深く勉強したい」「日本語の勉強方法を知りたい」「他の授業で習ったことも取り上げてほしい」「ワープロの使い方を習いたい」「日本の社会についてもっと知りたい」「楽しい授業にしてほしい」と求めている。このように、日本語授業の内容面で留学生は日本語の基礎的レベルから専門的レベルに至るまで多様な要望をもっていることが明らかになった。

授業方法では、「視聴覚教材を使ってほしい」、カリキュラムについては「授業時間数を増やしてほしい」と要望している。

以上の日本語授業への要望を一言でまとめることは困難であり、このように多種多様な要望があるということは、現状への不満であり、裏返せば自己の日本語能力をもっと向上させたいという強い願望の表れであるとも言えよう。このような要望は授業時間やカリキュラムなどさまざまな制限があってすべて取り入れることはできないが、教材や教授法を工夫、改善して留学生の日本語能力が向上するよう手助けしていかなければならない。

表18 日本語の授業で特に習いたいこと (3つ選択)

論文・レポートの書き方	21
口頭発表の仕方	19
日常会話	14
日本の文化や社会	13
文法	12
論文・レポートの読み方	8
長文読解	8
聴解	5
専門用語	4
漢字	4
その他	0

表19 日本語の授業に対する要望 (自由記述)

(1) 授業内容
レポートの読み方、書き方を習いたい
新聞・雑誌・物語・映画について習いたい
専門用語・流行語・外来語を習いたい
方言・アクセント・俗語・諺を習いたい
語彙を豊かにしたい
作文をたくさんしてほしい
ヒヤリングの練習をしてほしい
日常会話を勉強したい
長文読解を勉強したい
文法を習いたい
表現方法を教えてほしい
基礎的な練習をしてほしい
日本語をもっと深く勉強したい
日本語の勉強方法を知りたい
他の授業で習ったことも取り上げてほしい
ワープロの使い方を習いたい
日本の社会についてもっと知りたい
楽しい授業にしてほしい
(2) 授業方法
視聴覚教材を使ってほしい
(3) カリキュラム
授業時間数を増やしてほしい

おわりに

以上のニーズ分析の結果、留学生は大学の授業において日本語能力面で様々な問題を抱えていることがわかった。なかでも、専門的抽象的なレベルの日本語能力の不足のために発表やレポート作成に困難を感じている。このような問題点についての自己認識は、日本語授業への要望としても反映されたものであり、定期試験の結果にもあらわれていた。その改善のためには、基礎的日本語を強化しつつ専門用語の導入、発表やレポート作成にふさわしい表現方法の指導を重点的に行っていく必要がある。4技能のなかでは聴覚認知力向上のため「聞く」練習を重視する必要がある。

さらに、日本語の授業時間が週2コマという制度上の制限から判断すると、効果的な自学自習方法の指導が必要となる。しかし、自分で学習する方法がなかったとしても、実際にはアルバイトにおわれて学習時間を十分にとれないのが私費留学生の現状である。そこで、少しでもアルバイトの時間を減らせるようになお一層各種奨学金の充実がはかられることが望まれる。

また、日常会話における表現方法を豊かにするためにも、日本語の学習効果をあげるためにも、大学で日本語を使用する時間が長い方が望ましい。しかし、自国語を話す方が多い留学生が約4割もいる。実際に日本人の友人がなかなかできないと訴える留学生もあり、今後日本人学生と留学生がもっと交流できるような対策を講じることが課題である。例えば、授業方法において留学生と日本人学生の混成グループをつくり共同発表するような課題をあたえる方法が考えられる。留学生は日本語を話す機会をもつことができるし、日本人学生から日本語の間違いを訂正してもらうこともできる。さらに、日本人学生と留学生が協力して課題を遂行する過程で相互に交流ができ理解も深まり、ひいては授業をはなれてもその交流をさらに深め広げていくこともできるであろう。

そして、方言や諺など語彙を豊かにするには、本学部が開講の日本語に関連した専門科目(例えば「国語学概論」など)の履修により補うことも可能であり、留学生に対して科目履修のアドバイスが必要である。

最後に、本学部の教授言語は日本語であり日本語能力が不十分であることは留学の成否そのものを左右するほど大きな問題である。「日本の大学に4年、日本語学校も入れると6年間も留学して帰国した時に、日本語がへただったら恥ずかしい」という留学生のことはを真摯に受けとめ、日本留学が成功するように支援していくことが受け入れ側の責務であると考えている。

《注》

1. 権藤与志夫・白土悟「外国人留学生の学習と生活に関する諸問題—九州地区国・公・私立大学における質問紙調査報告—」『比較教育文化研究施設紀要』第39号, 1988, 69-98など。
2. 仁科喜久子・武田明子「理工系大学における外国人留学生の日本語能力に関する調査分析—東京工業大学大学院課程を中心に—」『日本語教育』75号, 1991, 113-123。田村二美代・佐藤美恵子「日本語に関する実態調査と分析その1—筑紫キャンパスの留学生を対象に—」『九州大学留学生センター紀要』第5号, 1993, 91-106など。

3. 金久保紀子他によると、各分野の専門用語の教育だけでは不十分であり、その分野に特徴的な構文、聴解上の注意などの体系的な教育の重要性が明らかにされている。（「講義の日本語における理科系・文化系の特徴」『日本語教育』80号，1993，74-90。）一方，仁科喜久子・武田明子の研究では，理工系大学院留学生の場合，基礎日本語・科学技術日本語・日本社会，文化の三要素が必要であるとしている。（「理工系留学生の日本語能力に関する教官へのアンケート調査分析」『人文論叢』No. 17，東京工業大学，1991，99-107.）
4. 表6中の各項目ごとの%の合計では32%になるが，ここでは比較のため合計人数の占める割合を使用し33%とした。
5. 「特集：漢字を教える」『日本語』1992年8月号。加納千恵子他「漢字能力の測定・評価に関する一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』1992，177-191。加納千恵子他「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』1994，41-50など参照。

〈主要参考文献〉

- ・田中 望『日本語教育の方法—コースデザインの実際—』大修館書店，1988，3-13。
- ・田中 望「コースデザイン」『講座日本語と日本語教育』第13巻日本語教授法（上），明治書院，1989，93-110。
- ・林 大他編『日本語教育ハンドブック』大修館，1990（初版）。
- ・横田淳子「専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法」『日本語教育』第71号，1990，7，120-133。
- ・「特集」漢字指導の問題点『日本語教育』第80号，1993，7。
- ・「特集」専門分野別日本語教育『日本語教育』第82号，1994，3。

(Abstract)

This paper gives the results of a survey about the ability required for foreign students in the Faculty of International Studies of Culture at the Kyushu Sangyo University.

The survey asked students to write about their background in Japanese language studies, to evaluate their ability in Japanese, and to write about any problems they have understanding or performing their studies in college.

The survey also asked students to explain how they deal with the gap between their ability in Japanese and the Japanese required for their studies, and to note any requests they have for their Japanese classes.

The results of the survey show that the foreign students have trouble understanding and taking part in abstract and technical discussions and that they also find it hard to say suitable expressions in daily conversation.